

## 共創学に向けて

郡司ペギオ幸夫\*

早稲田大学、「共創学」編集委員長

## Toward Cocreationology

Yukio Pegio Gunji\*

Waseda University, Editor in Chief of “Cocreationology”

\* Corresponding Author: yukio@waseda.jp

何年前か前、障害者施設の介護士が、施設で寝たきりの人々を殺害するという事件がありました。犯人は現在も自分の所業を悔いることはなく、世の中にとって役に立たない人間を排除することで、自分もようやく世の役に立てたと、本気で思っているそうです。犯人に対する憤りは、なぜ他者に寄り添えないのか、といった感覚から出発し、同じ人間という感覚の欠如に訴えるものが殆どでした。

しかし他者を慮るという思想を、感覚の共有に訴える議論は極めて脆弱です。共有する集団を例えば人間と名付けるとき、同じ人間である根拠を訴えることは、人間の外部を排除することに他ならないからです。それは、役に立つ人間とその外部を分離し、役に立つ人間の外部、すなわち役に立たない人間を排除しようという犯人の思想と、その根底において通じてしまうのです。他者と共に生きるという思想は、共に生きる根拠を積極的に構想する形では不可能です。それは根拠を際立たせるために、その外部を無自覚に排除してしまうからです。

ここには、わかりやすい逆説があります。外部という言葉を使うだけで、その差異化は区別から差別を匂わせる。そこで自らの属する内側とその外側を区別しない地点に立たなければいけない、そう言ったとしましょう。しかしその内と外を区別しない特定の文脈は、内と外に共通の性格を取り出すか、両者の矛盾を解消した文脈で設定するか、いずれかになるでしょう。それは内と外を見渡す文脈や論理を予め持ち込まないことには不可能です。つまりそこでは、内側と接続可能な、特定の文脈で見渡せる外部のみが外部とされ、さらなる外部を無自覚に排除してしまっている。外部を取り込もうとする試みが、新たな外部を作り出し、排除してしまうという逆説が認められるわけです。

外部と共に生きる、他者と共に生きる、という行為の

根拠を、積極的、能動的に構想することが不可能であるとき、我々に求められるのは、徹底して受動的な態度であり、受動性を徹底する技術や理論です。徹底して受動的な態度をとる「わたし」において、存在する外部は、実は認識されるのではないことがわかります。認識は認識主体とその外部を明確に分離し、認識対象とその外部を分離することで可能だからです。ただ見る、ただ知る、知覚する、という一見受動的な振る舞いでさえ、認識主体を前提とした、能動的な営為となるわけです。

徹底して受動的な「わたし」は、だから、外部を知覚し、認識するのではない。外部は感じられるだけで、極めて不確かなもので、実のところ「わたし」の外側に位置するものかさえ曖昧です。なにしろ「わたし」は世界に対する明確な境界さえ持ち得ないからです。外部と共に生きるとは、この徹底した受動性の果てに構想されるのです。

自然科学は多くの場合、等質的なものを基盤とし、定性的な分析から定量的な計算へ向かおうとします。異質性に対する感覚を重んじる、芸術を含む人文学の多くは、まさに外部に対する感覚において、一步先んじている気もします。しかし他者と共に、外部と共に、という能動的な試みは、前述のような逆説を含んでしまう。自然科学における外部は、ゆらぎでありカオスです。散逸構造は、これを受け入れることで成立する存在として構想されました。ただし、ゆらぎをうまく利用する構造が、特定の非線形力学系として指定される（＝能動的に構想される）ため、徹底した受動性はまだ望めません。決定論的システムのはずがゆらぎを内在してしまうカオス力学系は、内在する外部の表現として、受動性のうまい表現になっている。しかしやはり力学系はパラメータの指定によって特定され、徹底した受動性には至っていません。自然科学においても、人文学においても、「外部と共に」、「他者と共に」なる思想は、未だ始

まったばかりなのです。

だからこそ、共創学は、新たな学問として開設される意義を持っている。以下に掲げられるものは、創設され

たばかりの共創学会理事らによる、「共創とは何か」に関する試論です。そう簡単に結論は出ないでしょう。しかし、これらを出発点として、共創学は鍛え上げられていくことでしょう。それを期待してやみません。